

李商隱の「曲江」をどう読むか？—その「傷春」の意味—

下定 雅弘

はじめに

李商隱に「曲江」という七言律詩がある。(1) 李商隱の詩は難解とされるものが多いが、この詩もその一つ。一首の主題についても各聯についても、さまざまな解釈がなされている。なかでも見方が分かれているのが、末聯の「天荒地變心雖折、若比傷春意未多」についてであり、特に「傷春」の一語が何を意味しているのかということである。拙文では、この「傷春」の意味について考え、それが商隱の詩を理解する上で極めて重要な語であることを述べたい。

一 私の読み方

まず、私の読み方を示す。

望斷平時翠輦過 望みは断たる 平時^{すいけん} 翠輦の過ぎりしを
空聞子夜鬼悲歌 空しく聞く 子夜^き 鬼の悲歌するを
金輿不返傾城色 金輿は返らず 傾城の色
玉殿猶分下苑波 玉殿は猶お分かつ 下苑の波
死憶華亭聞唳鶴 死なんとして華亭^{おも}を憶う 唳鶴^{れいかく}を聞かんことを
老憂王室泣銅駝 老いて王室を憂いて 銅駝に泣く
天荒地變心雖折 天荒れ 地変じ 心折ると雖も
若比傷春意未多 若し春^{いた}を傷むに比ぶれば意未^{いま}だ多からず(2)

『集解』は、大和九年の翌年、開成元年(八三六)に編年している。「曲江」は、唐代長安の最大の遊樂地区。安史の乱後、荒廃していたが、大和九年(八三五)春、文宗は天宝の栄華を思つて復興を指示する。だが、まもなく「甘露の変」が起こり、曲江の修復は中止された。「甘露の変」とは、大和九年十一月、宰相の李訓等が宦官仇士良等を除こうと謀つて、

事前に察知され、逆に誅殺された事件(『旧唐書』卷一七下「文宗」下に詳しい)。この詩は、主にこの事件を意識しつつ作られているだろう。この詩の部分もしくは全体につき、玄宗・貴妃の天宝の事件を詠じているとの説もある。商隱の詩の常として、各句の表現にはさまざまな想念と感懐が背後に存在し、あるいは併存する。いま六句までについて示すのは、あり得べき一つの読み方に過ぎない。

一・二句、「翠輦」は天子の乗る車。「子夜」は夜半。「鬼悲歌」は、死者が悲しげに歌うこと。仮りの拙訳(以下同じ)、「文帝の翠^{みどり}の御車が大通りを進んでいたあの情景は、もはや見ることはできない。今は夜中に、(宦官に)殺された人々の恨みの泣き声を聞くばかり」。

三・四句、「玉殿」は宮殿の美称。「下苑」は曲江。「分波」は、曲江の水が「玉殿」のそばの御溝に入っているのでこういう。「黄金の車に傾城(楊賢妃)が乗って返ってくることはもはやないが、玉殿は以前のままだに曲江の波を分けている」。

五・六句、「陸機は死に臨んで華亭の我が家に飼う鶴の鳴き声をもう一度聞きたいものと思ひ(『晋書』卷五四「陸機伝」に拠る)、老いた索靖は天下が乱れることを予見して、洛陽の宮門の銅の駱駝を指し「お前を荆棘の中に見るだろう」といって泣いた(『晋書』卷六〇「解系伝」に拠る)」。この陸機と索靖のように、朝臣たちは惨死し、王朝の命運を傷んだ。この二句、あるいは、前半とは別個の「天荒地変」の事例であるかも知れない。

以上、主として『集解』に拠りつつ、一つの解を記した。六句までについてのさまざまな読み方は、どれもが商隱の脳裏にありあるいは、よぎったものであるかも知れない。だが七・八句の意味は、私の見る所、一つであり、実に明瞭である。

七・八句、「天荒地変心雖折」は上の六句を全部受けている。「この天荒地変ずる惨劇に、人々の心はくじけ肝もつぶれた、だがその悲痛な思いも、「傷春」、即ち自らの生命を燃やすことかなわぬ私の悲しみと悶えに比べれば、それはまだ知れたものなのだ」。以下、この読み方が妥当であることを論ずる。

二 従来解釈

この詩、全体について、各句について、さまざまな議論がなされてきたが、学者たちが最も苦慮してきたのは、七句と八句「傷春」との関係はどう捉えるかということである。従来の説は大きく二つに分けることができる。一つは、七八句をひとつながりと見て、大きな違いを認めない説。一つは両者は違うものと見る説。違うものと見る説は、さらに、「傷春」が何を指すかをめぐってさまざまな分岐を見せる。

ひとつながりと見るのは、例えば、明・朱鶴齡『李義山詩集箋注』が「此の詩、前四句は玄宗と貴妃臨幸するの時事を追感し、後四句は則ち王涯等の禍を被り(甘露の変を指す)、憂いは王室に在りて、天荒れ地変ずるの悲しみに勝えざるを言うなり」といい、清・陸崑曾『李義山詩解』が、「此の詩、上四句は玄宗の朝事に溯り、下四句は文宗の時事に感ずるなり。……後半は朝廷升平の故事(玄宗・貴妃らが曲江に遊んだこと)を復さんことを思い、方に興葺(修復の意)するを謀るに、(王)涯等禍を被り、憂いは王室に在るを言う」等というものがそうである。

違うものとする例を二、三挙げよう。清・程夢星『李義山詩集箋注』は「七八二語は、上句は大和九年正に甘露の変に当たるは固より傷む可きを言い、下句は開成元年正月百官に曲江に宴するを賜ること尤も傷む可きなるを言う、蓋し痛み定まりて痛みを思うの言なり」という。これは、七句を甘露の変に対する悲痛な思いとし、「傷春」は「痛定思痛(苦しみが過ぎた後に苦しかった時を思う)の悲哀だとする。

清・馮浩『玉谿生詩集箋注』は、「蓋し文宗制を闡奴(宦官のこと)に受け、南司(宰相を指す)塗炭するは、已に天荒れ地変ずるの恨みに勝えず、孰か知らん宮車晩出して、并っして深宮の一愛姫を保たざらんとは」という。これは、七句は上六句を受けて甘露の変を指し、「傷春」は楊賢妃が亡くなったことへの悲哀だとする。森槐南・高橋和巳はこの馮浩の説を襲う。(3)

近人・張采田『玉谿生年譜會箋』は「此の詩は専ら明皇(玄宗)・貴妃の事を詠ず。……金輿の一聯は、苑波猶お玉殿に分かれて、傾城已に金輿を返さざるを言う、謂う所の傷春なり」という。これは、七句は上六句を受けて天宝の事件を指すものとし、「傷春」は楊貴妃の

死を指すとする。

『集解』は、「天荒れ地変ず」は即ち流血千門、僵戸万計の甘露事変を指す。「傷春」は則ち時事に感傷し、国家の前途命運を憂い^{おも}念うの情を指す(一一三八[第一冊一三八頁の意、以下同じ)という。これは、甘露の変を「心折」る事件とし、だがこの事件よりも、事件が顕現している国家の衰退こそが重大事であり、国家の命運を憂う情が「傷春」なのだという。「憂いは王室に在り」という朱鶴齡や陸崑曾の立場に近い。

これらの例(『集解』に挙げる多数の例をも見よ)、七句については、天宝の事件を詠うとするとせよ、甘露の変を詠うとするとせよ、大体において五・六句までを承けていると見る。最大の問題は八句の「傷春」である。実にさまざまな考えが示され、苦慮の跡が見える。

上述したように、私の「傷春」についての考えは、これら過去の見方とはまったく異なる。ひとつつながりのものとする立場でもないし、ちがいを説明してきた従来のいずれの見解でもない。

だが、近ごろこうした過去の見方とは異なる注目すべき見解が現れてきた。例えば羅宗強『唐詩小史』(陝西人民出版社、一九八七年。第五章第二節)に次のようにいう。「“伤春”显然是属于个人身世感念的内容,……比如说,国家衰败,而自己又无能为力;自己无所作为,而岁月又匆匆流逝,由是而产生一种巨大的难以排遣的人生之悲哀」(二八一頁)。羅氏は、「傷春」は、個人の身世への感慨であり、国家の衰頹に対して何事もなすことができない所に生まれるやり場のない悲哀だという。

私の説は羅氏に近い。商隱の悲哀は、国家の衰頹や悲劇と関係している。だがそれは、国家の命運を悲しみ傷む思いではなく、自分がこれと関わるができない、自己のありようについての悲痛であり苦悶である。

三 李商隱詩の「傷春」の用例

「曲江」の「傷春」の語義を確かめるのに何よりも有効な方法は、商隱の他の詩において、「傷春」がどのような意義をもつのかを調べることである。

李商隱がこの語を用いた例は、「曲江」を含めて七例ある。「傷春」を含む一句または二句とその詩題を挙げる。①「若比傷春意未多」(「曲江」、一一三二)、②「我為傷春心自醉」(「寄惱韓同年二首」其二、一一八七)、③「問君傷春句、千辭不可刪」(「朱槿花」其二、二・六六〇)、④「刻意傷春復傷別、人間唯有杜司勳」(「杜司勳」、二・八七五)、⑤「曾苦傷春不忍聽、鳳城何處有花枝」(「流鶯」、二・八九一)、⑥「莫驚五勝埋香骨、地下傷春自白頭」(「與同年李定言曲水閑話戲作」、四・一七七九)、⑦「年華無一事、只是自傷春」(「清河」、五・一九三八)。

いま①「曲江」以外の六例につき、「傷春」の意義を確かめよう。ただし、④「杜司勳」は、商隱の詩の中でもよく知られる一首であるとともに、「傷春」が杜牧のそれを指している点で他と異なる。この検討は最後とする。以下、紙幅のつごうで、語句(典故を含む)の説明は最小限に留めざるを得ない。読者は、「傷春」を含む二句に集中されたい。

②「我為傷春心自醉」(「悩みを韓同年に寄す二首」其二)。詩題に注があり、「時に韓は蕭洞に住む」という。「韓同年」は韓瞻。王茂元の婿。義山と同じ年に進士に及第したので「同年」という。「蕭洞」は妻の実家。韓が王氏の娘を娶り、まだ新居を構えずに「蕭洞」に住んでいたことをこういう。「蕭洞」の語は、蕭史が秦穆公の娘弄玉を娶った故事に拠り、「洞」は神仙洞府の意を含む。この二首は、まだ結婚していない商隱が、新婚生活を送っている韓に対する羨やみと悩ましい思いを詠じて寄せたもの。其一は、辛夷の花が美しく開いているこの春の日を大切にしろ、そのうち風雨にさらされて散ってしまう、一切は灰となるのだと詠じて、短い新婚の楽しみを思い切り味わいなさいとの意を伝えている。

其の二を見よう。「龍山 晴雪 鳳楼に霞^{かすみ}かかる、洞裏 迷える人は幾家有りや?我れは傷春の為に心^{おの}自ずから酔う、君を勞して石榴花^{すず}を勧めしめず」。

一句、「龍山」は、韓が婿入りした家の美称。「鳳楼」は、蕭史・弄玉が暮らす鳳台(『列仙伝』巻上)。ここは韓が新妻と暮らしている所。韓の新婚生活を仙境での暮らしに譬えている。二句、「迷人」は、後漢の劉晨と阮肇が天台山に入り迷って返らなかった故事に基づく。その仙人のような暮らしができる人はめったにいないの意。結句、「石榴」は酒の名。三・四句、私はもうとっくに「傷春」の思いで内心酔っている、君に石榴酒を飲めと

勧めていただく必要はない。この「傷春」は、韓が結婚して幸福な日々を送っているのを羨み、自分は相手もなく(情熱をそそぐ対象も無く)無聊の日々を過ごしている懊悩である。

③「問君傷春句、千辞不可刪」(「朱槿花」其二)。「朱槿」は、和名べにむくげ。其の一は、朱槿が朝に開き夜に散っていくのがあまりにすみやかなことを詠い、天涯にある不遇の自分と朱槿とが寂しく向かいあう情景を描いている。

其の二を見よう。「勇 多くして路を侵して去く、恨むらくは礙燈にして還る。嗅げば自ずから微微として白く、看るうちに沓沓として殷なり。坐して物外を忘るかと疑うも、帰りに去るに簾の間有り。君に問う傷春の句、千辞 刪る可からず」。

一句、「勇多」は、思い切って。二句「礙燈」は深夜。両句、一日の変化のすみやかな朱槿を見るために、朝早く出かけ、夜おそく帰ることをいう。三句、「沓沓」は、あつというまに。四句、「殷」は暗みを帯びた紅。両句、朝は淡い白色であるものが、夕暮れには暗い紅に変わってしまうことをいう。五句「坐疑忘物外」は、朱槿を見つつ坐っていると、一切を忘れ自分と物との区別さえなくなってしまうの意。『莊子』「大宗師」に見える「坐忘」の語を引き延ばしたもの。六句、だが帰ってみればただ簾が垂れているばかりの寂しさ。七句、「問君」は詩人の自問自答。この私の「傷春」の思いを詠った言葉は、千字・万字あったとしても削れない、それほどに尽きることなく深いものなのだ。「傷春」は、自分が真剣に打ちこめるものをもたない無聊寂寞をいう。

⑤「曾苦傷春不忍聽、鳳城何処有花枝」(「流鶯」)。「流鶯 漂蕩して復た參差、陌を渡り流れに臨みて自らを持せず。巧みに囀りて豈に能く本意無からんや、良辰 未だ必ずしも佳期有らず。風ふく朝 露おつ夜 陰り晴るるの裏、万戸千門 開閉するの時。曾て傷春に苦しみて聴くに忍びず、鳳城は何処にか花の枝有らん？」

一句、商隱は、長安の街中をあてどなくゆきかう自らを「流鶯」に見ている。二句、鶯はやみくもに動きまわる自らを制御することができない。三句、その囀りには本心が託されているのだが、わかる人はいない。四句、天気の良い朝だからといっていい出会いなどはない。五・六句、昼も夜も、晴れの日も曇りの日も長安の町中を飛びまわる。七・八句、

作者がはっきり顔を出す。この「傷春」の鳴き声に苦しみ、この声を聴くにしのびない、鳳城(長安)のどこに鶯が羽を休める枝があるのだろうか？この「傷春」は、「流鶯」と同じように、春まっさかりの中、空しく動きまわるのみで、落ち着く場所を得ることのない悲哀である。

⑥「莫驚五勝埋香骨、地下傷春自白頭」(「同年の李定言と曲水にて閑話したわむ戯れに作る」)。「海燕しんし参差として溝水流る、君と身世を同じくし離憂しんぜいに属す。花下に相い携うるも秦贅しんぜいに非ず、泣なみだに対して春天 楚囚しうに類す。碧草 暗おほに侵し 苑路うがを穿つ、珠簾 卷かず 江に枕する楼。驚く莫れ 五勝 香骨うずを埋むるを、地下に傷春す 亦た白頭」。

詩題、李定言は事跡不詳。「曲水」は曲江。「閑話戯作」というから、以下の内容が事実かどうかにかかわることはない。一句、「海燕」はうみつばめ。「参差」は、ふぞろい。「溝水流」は、楽府古辞「白頭吟」(『楽府詩集』卷四一)に「躑躅しうちゆうす(歩いてゆく)御溝の上、溝水は東西に流る」とあるのを意識する。二句、「離憂」は、憂うべき事態に遭遇すること。一・二句、私とあなたとは、海燕が別々に飛ぶように、お溝ほりの水が東と西とに流れるように別れてしまい、ともに似た境涯で苦難に出あった。三句、「秦贅」は入り婿となること(『漢書』卷四八「賈誼伝」に拠る)、四句「楚囚」は囚われて他郷に在る者(『左伝』成公九年に拠る)。三・四句は、花の下で愛しあったのにいっしょになれず、この春の日、共に意に沿わぬ境遇に陥って涙するの意。五句、小苑に向かう道は緑の草でおおわれてしまったとは、道が断たれたことをいい、六句は、簾は巻き上げられず、二人が時を過ごした河べりの楼にもはやあなたはいないの意。両句、愛した人はすでに亡くなり、かつて遊んだ場には空しさを詠う。七句「五勝」は水を指す。『漢書』卷二一上「律曆志」に「戦国擾攘するも、秦天下を兼ね。……亦た頗る五勝おほを推し、自らは以為らく水徳おもほを獲たりと」とあり、注に「孟康曰く、五行は相い勝つ、秦は周を以て火と為し、水を用って之れに勝つ」とあるのに拠る。女はおそらく河に身を投げて死んだ。七句は、曲江の水底に愛した人の遺骨が沈んでいることをいい、八句は、水底にいる彼女が私と同じように「傷春」の思いを抱き続けいまや白髪になっているだろうの意。この「傷春」は、実らなかった愛を怨み、春の盛

りに命燃やすことかなわずして悶える女の思いである。

『集解』はこの詩の「傷春」について、「曲江」の「時を傷み乱に感ずる傷春とは顯然として同じからず、男女の情に属し政治に関わること無し」という。だが、「傷春」の意はさておき、同じ語が、一人の作者において、それほどまでに異なる用いられ方をするだろうか？

⑦「年華無一事、只是自傷春」（「清河」）。「舟ちい小さくして回めぐること仍お数しばしばなるべし、楼危たかくして凭もたるること亦た頻りなり。燕は来たり従まつりいて社はなはに及び、蝶は舞あきいて太だ晨を侵す。絳雪こうせつもて煩を除くの後、霜梅そうばいに味を取ること新たなり。年華 一事無く、只だ是れ自ずから傷春」。

「清河」は洛水。一・二句は、舟に乗って河をめぐり、また高殿の手すりにもたれ、春の訪れに、何もなすこと無く落ち着かない思いであることをいう。三句、「社」は「春社」、立春の後第五番目の戊の日に土地神をまつって豊年を祈る祭。第三句は、燕がちょうど春祭りの時期にやってきたことをいう。それは時宜に適しているのだが、四句、蝶が明け方まで飛びかっ、そのために心が落ち着かない。五句「絳雪」は丹薬。「霜梅」は塩漬けした梅。両句は、丹薬の力で憂い煩いを除き、霜梅の酸っぱく苦い味で気持ちを新たにしようとするの意。結句、春の訪れるこの華やかな時節に自分は何も為すことができなく、ただただ「傷春」なのだという。この「傷春」は、万物が燃え出でて命を盛んに燃やす春に、自らはそれとともにあることができず、空しく悶える思いである。

④「刻意傷春復傷別、人間唯有杜司勳」（「杜司勳」）。「高楼 風雨 斯文に感ず、短翼 差池として群に及ばず。意を刻みて春を傷み復た別れを傷む、人間 惟だ杜司勳有り」。

杜司勳は杜牧。一句「高楼風雨」は商隱が杜牧の詩文を読んでいるその場であり、商隱の境遇であり、また杜牧の一生がそのようなざわめく時代であったことをもいうだろう。

「斯文」は杜牧の作品。二句「短翼差池」の「短翼」は短くて力の弱い羽。「差池」は、ふぞろい。この句は、杜牧の生涯が多難で、同じ時期に進士に合格し、官僚となった連中に、出世の点では及ばなかったことをいう。三・四句、骨身を削って「傷春」「傷別」の思

いを詠ったのは、この世で杜牧ただひとりだ。

この詩の「傷春」は杜牧の作品を意識する。それが何を意味するのかは、以上五首の「傷春」の例よりも把握しがたい。だが、この詩は杜牧への深い共感をもって詠じられており、商隠自身の境遇と創作への感慨と重なっていることは疑いない。三句は、上二句を承けている。不遇の人生を送った杜牧の心情を、「傷春」「傷別」に満ちた人生だとし、四句、それを骨身をけずって真剣に詠った人は杜牧しかいない、まさに自分と同じようにと、詠っているであろう。そして「傷春」が「傷別」と並ぶからには、二つの語は、互いに「春を傷み」「別れを傷む」映像に重なり溶けこむものでなければならない。この「傷春」も、志を実現する場を得ない悲しみを核とする所の、命燃やすことかなわぬ己の身世への悶えである。

『集解』は、この詩の「傷春」について、「曲江」の「傷春」と同じであり、「其の(杜牧の)詩文は国を憂え時を傷むの感を明示する、此れ即ち謂う所の傷春なり」という。「傷春」の意をこのように限定するから、「曲江」のそれと、時には全く異なり、時には明らかに同じになる。一般に、ある作者がある語を用いる場合、どの場合にも通じるその作者が納得している意味があるのであり、ここではこういう意味、あそこではああいう意味と、意味が大きく変わることはない。李商隠が、「傷春」の語を使う場合も同じことである。

以上に見た例で明らかのように、いずれの例にも共通する意味を「傷春」は持っている。それは、要するに、春の盛りに、その春とともに生命を燃やすことができない悲しみと悶えである。

「曲江」にもどろう。「曲江」の「傷春」も同じ意味で用いられている。李商隠は、「天荒地変」の惨劇を見つめている。これを逆に見れば、李商隠は「心折」の側にはいない。もし李商隠自身の心も折れてしまうのであれば、それは時代の現実とのコンタクトを果たしている。だが、商隠はこの惨劇の外に在る。この惨劇の中の人として、自己の生命を燃焼させることができない。商隠は、これを「傷春」といっているのである。時代への絶望が深すぎるゆえに、時代の悲劇から疎外されている人間の悲しみと悶え。それがこの「傷

春」である。

杜甫に「傷春五首」(『杜詩詳注』卷十三)と題する詩がある。閩州に在って、戦禍の絶え間がないのを嘆き、天子の難儀を憂え、家族の離別を悲しむ作だが、この「傷春」は、「春望」の悲しみと同質のものである。杜甫の場合は、憂国の悲しみと自己の不遇の悲しみとが一体であり、分裂していない。李商隠の「傷春」は、その傷みが、はっきりと自分自身の主体の問題へ向かっている。李商隠は、杜甫のように春を傷みたかったろうが、しかし、彼にはそれは不可能だったのである。

四 「傷春」の意義—傍証—

「曲江」は、六句までに述べた、「天荒地変」の惨劇を「心折」る痛ましいこととしつつ、最後の一句で、それをはねとばして、だがそれよりも私の「傷春」こそが痛ましいのだと述べている。これと構造がよく似ていて、「曲江」の末聯への理解をたすける作品がある。私の読み方の傍証となるだろう。

傍証の一つ。李商隠が、このように詩のほとんど全編で哀切悲痛な事柄を述べてきておいて、結びの句で示す感情こそが最も重く深いのだというのは、この詩に限ったことではない。例えば、「涙」(『集解』四——六三六)がそうである。「永巷に長年 綺羅を怨む、離情 終日 風波を思う。湘江の竹上に痕は限り無し、硯首の碑前に灑ぐこと幾多。人は紫台を去りて秋に塞に入る、兵は楚帳に残りて 夜 歌を聞く。朝来 灞水の橋辺に問えば、未だ青袍の玉珂を送るに抵ばずと」。

一句は天子の寵愛を受けぬままに老いていく宮女が絹織物に流す怨みの涙、二句は船着き場での離別を悲しむ人々の涙、三句は、湘水の竹の斑に今も残る舜帝の後を追って死んだ二人の妃の涙、四句は、襄陽の民が硯山の碑の前で將軍羊祜の徳を思って流す涙、五句は、王昭君が匈奴に嫁ぐため紫台(宮殿)を去る時に流した涙、六句は、項羽が四面楚歌を聞いて流した絶望の涙。そして結句は、これら誰もが知る歴史上有名な涙、あるいは誰もが経験する離別の涙を全部蹴飛ばしている。この全ての涙が、ある朝、長安の東、灞橋のた

もとで、青い服の下級官吏が、馬上に玉を鳴らしながら旅立つ貴人を見送る、その時に流す涙の悲しみの深さには、到底比べることができない、「青袍」の書生—自分—の涙こそが一番悲しいのだと。この表現の方式は「曲江」も同じである。上で述べた全てと対立させて、最後に主張する感情に決定的な力点があり、しかもそれはまさに自分の感情なのである。

傍証のいま一つ。「曲江」の結句は、「長恨歌」の結句「天長く地久しきも時有りて尽く、此の恨みは綿綿として絶ゆる期無からん」を意識して詠じている。天地の消滅、あるいは天地の激変よりも、自分自身のこの心の悲痛こそが重要なのだという論理において、両者は同じである（「長恨歌」のこの結びは、後、白居易が確立する「独善」の人生観をすでに、その核心において語っている）。「天荒地変」がもたらす精神の崩壊よりも、もっと重大な意義をもつもの、己がこの「天荒地変」に関わることのできない悲痛と苦悶、それが「曲江」の「傷春」なのである。

まとめに代えて

「傷春」の語が示す、命燃やす確かな対象を持たない悲しみと悶え。これは、李商隱の詩の全体に通ずる主題と見ていい。李商隱といえば、「錦瑟」や「無題」詩などの愛の歌こそは、その文学を特徴づけている。これらの愛の歌の多くは、「春心共に花の発くを争うこと莫かれ、一寸の相思は一寸の灰」（「無題」「颯颯東風細雨来」）といい、「劉郎は已に恨む蓬山の遠きを、更に蓬山を隔つこと一万重」（「無題」「來是空言去絶蹤」）というように、愛する思いの切実さをつきつめつつ、その切ない思いが決して満たされることのない空しさを歌っている。だからこそ、商隱はこうも詠う。「直い相思は了に益無しと道うも、未だ妨げず惆悵は是れ清狂なるを」（「無題」「重幃深下莫愁堂」）。愛する人との愛の日々をついに送ることのできない悲しみを描出した上で、この尾聯は、たとえこの愛に報いはなくとも、愛しぬいて苦しむ私の心は、「清狂」（人にたわけといわれようが貫きとおす反俗の精神）といえる価値を持つのだといっている。熱情の対象はついに得ることはできない。

外界との何のたしかな関係も結べなくなってしまうと、ついには、信じられるのは、それでも手応えがあるのは、この悶え苦しむ思い、これこそが自分ということになっていく。

愛する人—思いを傾ける確かな対象—を得ることができず満たされることのない悲しみと悶え、これが商隱の愛の歌を貫く思いである。そして、それはまた「曲江」の主題でもある。「夕陽は無限に好し、只だ是れ黄昏に近し」（「楽遊原」）の二句にしても、無限に美しい夕陽に魂を吸い寄せられるのだが、それはほんの一瞬に過ぎず、黄昏の接近によって自分の思いはあてどなくほおりだされてしまう悲哀を詠じている。「傷春」は、李商隱の詩の基調音であり、李商隱の文学を理解するキーワードである。

注

(1) テキストは、劉学鍇・余恕誠『李商隱詩歌集解』（中華書局、一九八八・一二。以下『集解』と略称する）を用いる。文中引用する先人の見解についても『集解』に拠る。

(2) 「傷春」、『四部叢刊』本（明・蔣氏刻中唐人集十二家）、『全唐詩』卷五四一は「陽春」に作るが、『唐音戊籤』（卷五七〇）に従う。馮浩『玉谿生詩集箋注』、陸崑曾『李義山詩解』、『集解』等、後の諸本、皆な「傷春」とする。なお『戊籤』は七句「雖」を「難」に作る。字形が似るための単純な誤刻と見る。

(3) 森槐南『李義山詩講義』一（東京文会堂、一九一四）、高橋和巳『李商隱』（岩波書店、一九五八・八）。